

第 142 話〈凝縮の 2 週間〉の要約と参考資料

第 142 話〈凝縮の 2 週間〉の要約

宮崎県教組岩戸小分会が西臼杵地区教研で土呂久公害について発表すると、「もっと科学的な裏付けを」と厳しい指摘を受けました。県教研までの 2 週間、現病・死因調査、患者のインタビュー、和合会議事録探し出しなど、公害史を明らかにする凝縮した日々が過ぎました。

第 142 話〈凝縮の 2 週間〉の参考資料

1 4 2 - 1 齋藤正健教諭の活躍

齋藤正健筆「土呂久鉍毒事件告発と私」（1974 年 4 月 7 日；B4 版手書き 82 枚）より

（西臼杵支部教育研究集会の）「公害と教育」の分科会は、この土呂久問題で終始したのです。4 時間近くの活発な討議の結果、「問題が重大だけに、地域住民の記憶に頼るだけでなく、もっと記録を集め全体をもっと科学的裏付けのあるものにしてほしい」ということになったのです。これは、私にとって予想もしていない厳しい結論でしたが、これによって、さらに告発に対する意欲が高まり、調査すべきことがらをはっきりわかったのです。「そうだ。私はあまりにも事件の大きさだけに目をうばわれてきた。どこのだれが何の病気で、いつ死んだのか、何の病気にかかっているかを調べなくちゃ！ 土呂久住民との座談会での話を忘れてしまっているじゃないか。戦前に福岡鉍山保安監督局に亜硫酸製造を中止するよう訴えた生き証人がいると言われたじゃないか！」。2 週間後にせまった県集会を前にしてこの集会は実に有意義なものになったのです。（略）

この集会が終わると、集会でのことをさっそく仲間に報告しました。15 名のうち 3 名（私を含めて）が教研の推進役になっていましたが、今後やるべき具体的行動を 3 名で検討しました。その結果、集会時に私が思いついた調査の他に、役場や保健所に行って資料を集めることになりました。この程度の打ち合わせで、しかも正確に言えば 2 週間も満たない日数で、私たちが予期していたものより、はるかに多い資料を収集し、11 月 13、14 日の県大会には、貴重な証拠書類を含めた、実に 60 ページにわたる部厚いレポートを提出することができたのです。（略）

高千穂町立病院は、高千穂町の中心地にあり、岩戸から 7 キロほど離れた所なのです。胸部疾患で結核病棟にいられること、それに、この人の名前が佐藤十市郎さん（71 歳）であることを教えていただいたので、すぐ見つけることができました。11 月 4 日のことです。木造建築の冷たい部屋に、一人だけで入院していられました。彼は私に会われた時は、びっくりされたようでしたが、私が岩戸小の教師であり、土呂久鉍毒事件を告発しようとしていることを知られると、ベッドからおり、大そう喜ばれて、鉄びんにお茶をつが

れながら自分の経験してきた苦しい闘いを一気にしゃべり始められました。(略)

この老人と私は固く手を握り合いました。彼の話聞き終わった後、私たちが土呂久鉍毒事件の資料を求めて保健所や役場に行ったけど、全然手に入れることができなかったことを告げ、どこかに証拠書類はないかをたずねた所、こう答えられたのです。「土呂久和合会ではほとんど毎年、亜硫酸煙害問題が話に出た。その議事録にこのことが記録してあるはずだ。確か、土呂久南のだれかが保管している」。この話を聞いた時の私の気持ちは、とうてい文章では書き表わすことはできません。私が期待していたことが事実になったからです。彼にお礼を言って病院を出た後、すぐ土呂久南の家々に電話をかけ、とうとうそのお家を見つけ出したのです。うれしくてうれしくてたまりませんでした。私は、その日は、夜もふけていたので、翌日の早朝にその家に電話をかけ、午前5時半頃家を出発して6キロ近く離れたその家にバイクでかけつけました。11月だったので寒いし、道は狭く、ライトバンだったら底がつかえそうな大きな石のごろごろしているまがった道、<あの鉍毒のしかれている道>しかもすぐ横が深い谷になっている危険な所を、もう夢中で、っ走りまわりました。お家についたのが6時近くでした。佐藤菊男さんというおうちです。菊男さん宅には近くの方も来られていました。みんなが坐ってられる大きないろりの近くに、明治23年の土呂久和合会創立時からの「土呂久和合会議事録」のつづりが何冊も重ねてありました。古めかしい物でしたが、中を見ると和紙に筆や鉛筆で話し合われた事項が、個条書きに簡潔に記されており、亜硫酸製造や煙害に関するところがいたる所に書いてありました。私はこれで「土呂久鉍毒事件」の全貌をしることになり動かぬ証拠を手に入れることができたのです。(略)

私は部落の人たちといっしょに「土呂久和合会議事録」をがむしゃらに読み、そして書き写し、勤務時間に間に合うすれすれの時刻まで、この作業を続けました。以後何回か、このおうちにはお世話になり、ごちそうを幾度となくいただきましたが、この時はみんな朝食抜きでした。午前7時50分頃までの2時間近くの時間にわたって、ぶっ続けで書き写しましたので、手がかなわなくなったようでした。この時の興奮は私以外の人には、とうてい理解していただくことはできないでしょう。

(和合会議事録抜粋、契約書、覚書、陳情書 略)

私はこれらの証拠書類を読んでいくうちに心の底から怒りが湧いてきました。「鉍山当局の責任者と行政当局は、被害に苦しめられてきた罰なき土呂久の人々に何という事をやったのだろう。試験焼きにても困ると強く言い張っていた住民に『地下資源の開発が岩戸村の繁栄に貢献を為すものである……』などという殺し文句を使い、説得し、しかも試験操業という名目を使い、要求があつたら直ちに操業を停止するという契約書まで作りながら(略)」

支部教研がすんで数日後、土呂久鉍害被害者の一人である佐藤鶴江さんから一通の手紙がきました。(略) 私が土呂久鉍害被害者からカセットを手にして生の声を録音してまわって50本を越えますが、その第1号となったのが彼女であり、ヒ素中毒特有の肌にて

きる黒斑点を見せられた最初の人でもありました。(略)

「調査団の皆様

私は 3 歳の時父母と共に土呂久鉦山へ来ました。いかに生活のためとはいえ、このような恐ろしい毒物とは知らず、もうもの心ついた 5, 6 歳の頃は「せき」がはげしく、のどはゼイゼイいうし、目は赤くただれ、もうその頃から医者通いが始まりました。長い 46 年間、入院、通院して今まで死にきれず医師の手当てを受けながら、夢もない希望もない私には、ただ、きょうの 1 日を生きる事が何よりの望みです。

昭和にはいり、昭和 19 年頃までに亡くなられた、それも、今の時代なら元気盛りなのに 50 歳になるかならぬかの間、次々と結核ばかり、最近になって肺ガンで亡くなられた人が 2, 3 人、当時も医者がいり医学が進んでいたのにあの結核患者の中にも肺ガン、胃ガンの方が大半いられたと思います。(37 人の名前がかかげられそのうち 3 人は朝鮮人。また、肺ガンと書かれている人が 2 人いました。名前は省略します。) まだたくさん入れかわり立ちかわり焼かれたものですが名前知っている人数です。

一応中止になり、その後は大分、佐賀ノ関へ持ち行き精錬していました。そして再び鈴木所長になり焼いたものです。付近の草木は枯れ草 1 本はえきらず、椎茸等全然できず、ナシ、柿、梅まで枯れてしまい、当時はミツバチせ全然いなかったものです。亜砒焼きが終わり年数がたつにつれミツバチも次第に多くなり椎茸も又盛んになりました。それと同様、私達の手や足の裏にあったコブコブもいつとはなしにへり、2 つ 3 つになりました。生きていても全然仕事もできない「めくら」同様、先のみじかい自分には白黒の決まる日の 1 日も早く来、せめて生活の保養でもできること、それのみ願うばかりです。

昭和 46 年 11 月 1 日記す

佐藤鶴江」